

小栗外傳



第一卷之

^13  
391.9  
8





門 へ13  
號 3919  
卷 8

海子才と教西心に古き物語に後流と



はるかに語らるるは是ハ明安見にふむるは云  
志をて多るに〜〜釋氏北方便に近一常

こと成中記備遺忘匡等ハ載すふと年

あり近年書肆の書に名一と述とま

善乎去年書肆文金堂裏日周の主人

寒燈夜話前候六巻と發見と今亦亦

次篇とと梓とて序辭成をぬ予熟と思ぬ

八葉巻二二



本邦の源治唐山の水滸傳、妻説ふとやと  
其又金玉に〜〜續よ〜〜正史と〜〜人尚是を  
賞し自ら勸懲の勅とや〜〜爾れ〜〜紫式部  
は死〜〜地獄〜〜羅氏、孫唾兒と生りてと  
和漢妻説と作為す心戒とす手漫とふ虚説  
と縁〜〜と覆車の戒と不思不知と〜〜踏  
〜〜下〜〜案呈因不審曰先生此以  
す〜〜何と〜〜新〜〜家法以告衆曰〜

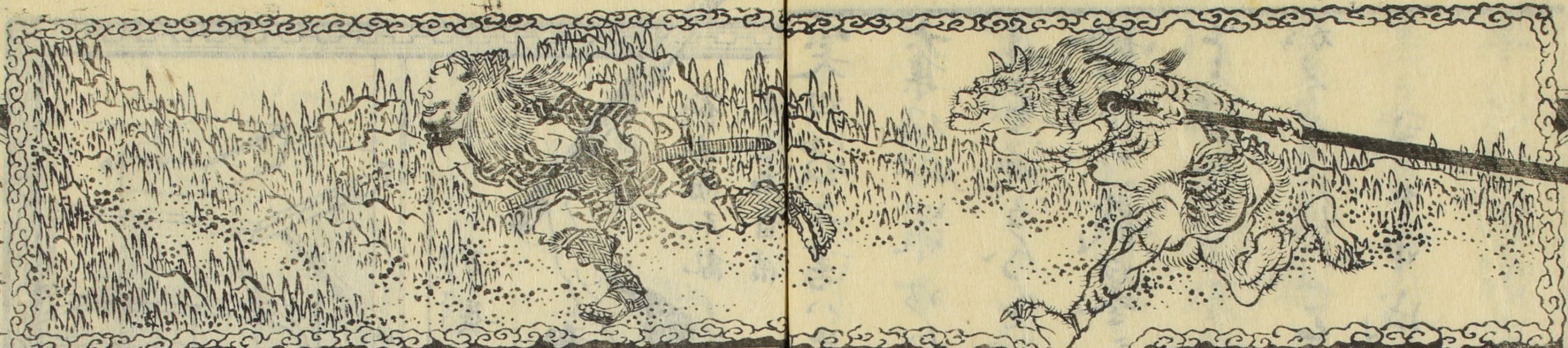
笑曰波二書ハ先生此言乃如く爾〜〜  
大集ぬれ罪ぬれ先生此編述此と〜〜  
其妻説ふと明白〜〜福〜〜家の勅と述〜  
燈下の戲墨〜詩よ善戯謔す〜  
〜〜何れ智〜〜と強よ〜〜  
か〜〜事〜〜  
辞〜〜と爾

文化甲戌西春

峰山樵文題

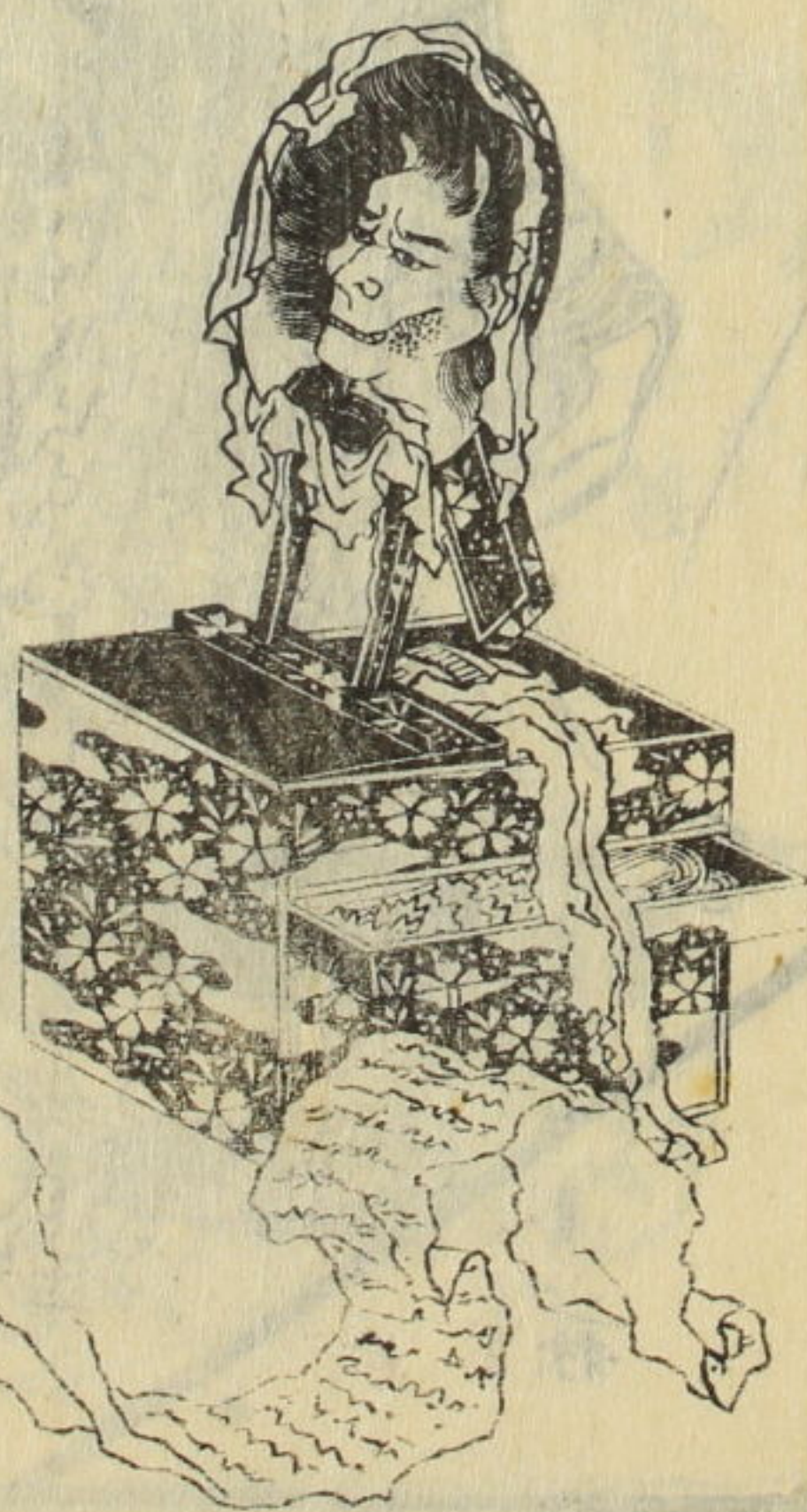






花見

妬寵而  
負特爭  
妍而取  
憐



兄弟園于墙外御

其侮



水戸小舟



水戸小四郎





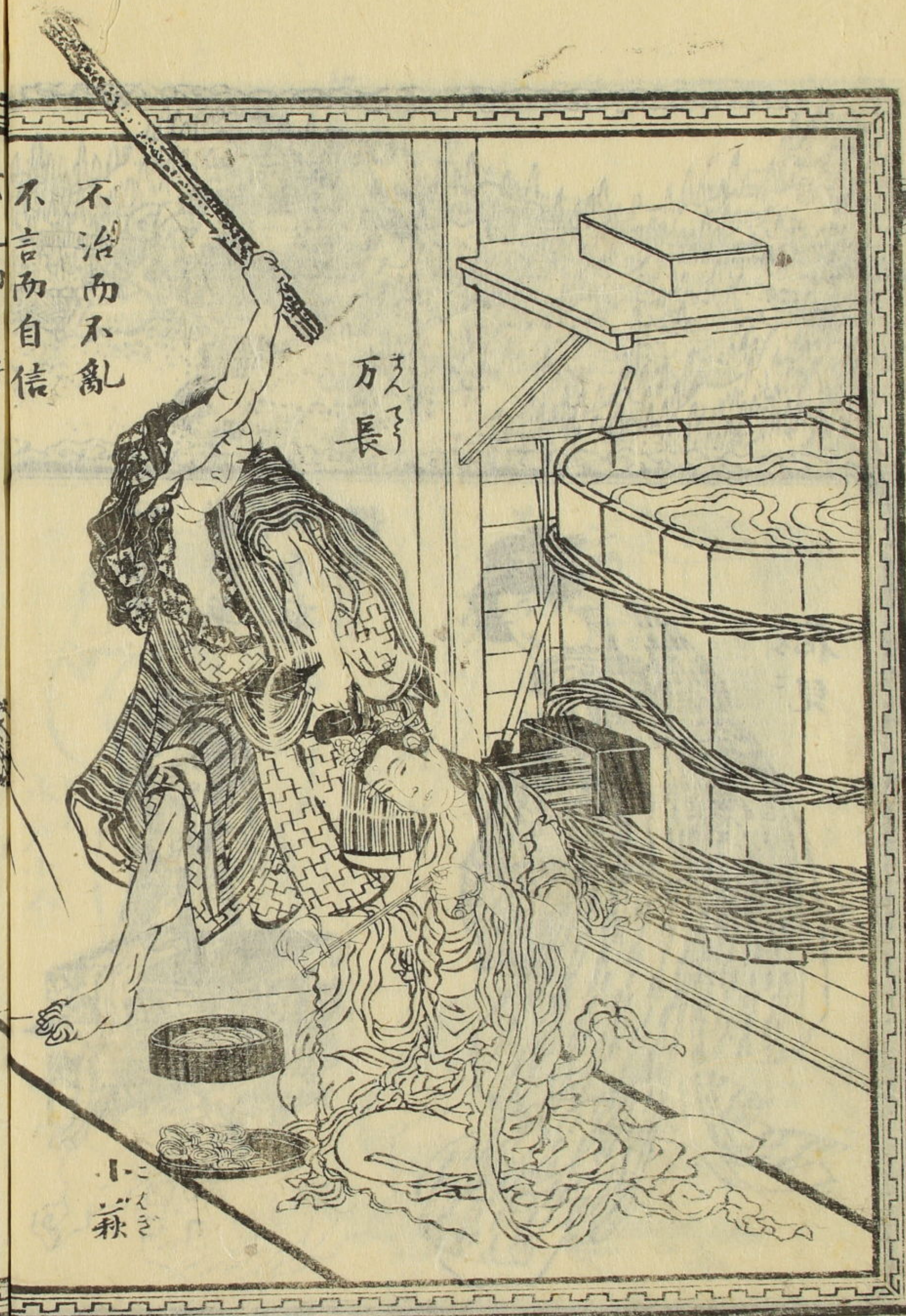
神童

不治而不亂  
不言而自信  
不化而自行  
蕩乎  
人無能  
名焉



万平

小等



万長

小秋



小栗外傳二編目錄

○卷之七

第 十二編 忠臣先非を悔て自ら敵小伏を  
負婦艱苦を忍で能く操を守る

○卷之八

第 十三編 處女小堂小画像を眷戀せ  
貞婦浴室小良人小奇遇せ

第 十四編

惡漢命を墮せ昔暮の驛  
忠臣主を救ふ赤阪の原

○卷之九上

第 十五編

忠義を貫て女主の身せ救ふ  
遺金を全して亡兄の志せ慰む

卷之九下

第 十六編

兩雄激しく居を濃洲に敷き  
奴婦怒り怨を草庵に述る

○卷之十

第 十七編

妬婦念死して救崇を為さ  
名馬苦辛して孤忠を伝ふ

○先生所著の小栗外傳六卷を文化丁卯の春稿せぬ此編も編て

舊稿を脱き以て刷刷氏の功速なるが故小前六卷は舊稿を

初編として既而文化癸酉春發見せり此編同刻成て發賣せりこれをも

初編を脱き以ては童幼の爲め其要を擴ぐこゝに誌して尤の如し

○應永六年鎌倉左兵衛足利左兵衛佐満兼公の時をとりて其比

満倉佐々女谷の叙する堂は怪し夫のり此叙音堂の昔矢口津はて討死を

遂に新田義貞主従十一人の靈を祭り処し用ひし一色詮秀満兼公を

幼めちせ小栗孫次郎満重名武常陸公篤光とをて觀音堂に破却

せしり其時堂の下は坑より十一の光物出現せり是則ち我貞主従の靈を

此時再び世に出る義興と小栗が家生まれ小次郎助重といへり郎等が

所より生れ生くる妻は奇傳あり後遂に前世の因縁を引く今世でも



主従とゆわたり其十人皆世に勝つては英雄の豪傑とてまことに名武馬光の  
 豫き佐々女谷の祝世音を信じて経が観音堂を毀てる時本尊を取きて  
 持佛とせり其後記音此利益を因て照天姫とまらけしる記音をの姫のま  
 本まるとなりぬ然る小栗と名武との親中なるも小次郎と照天三年紀の  
 似ゆかりとて許嫁として親を固くと夫より程経て一色詮秀小栗名武を怨む  
 のめて名武妻待従の身横山安秀と議て名武を害せしる横山名武  
 が家を侵奪せんと信をそじ従て照天を欺き二人を俱て相換國推現  
 堂村に忍びに射を窺居るる應保二十年徳倉の夏原持氏公は時一色が  
 誑よよめて小栗満重亡び失ぬ是より嚮小栗満重藤波と云妾を産む代  
 と云を生むる養娘は誘ひ我子小家を嗣とてく助重に誑とく追出せり  
 誘害せしはとて父仇を報んと強ひ途めて不圖も横山が家おさるる照天姫  
 と僧は横山に横山虎狼の心を懐れ鬼駢の馬とて小栗と食殺させんとせりかど  
 ねらひ又毒酒りて害せんと謀しを小栗是と推し照天と郎を俱て横山が  
 家を逃れ六浦の方走りしは横山が追まの勢は逐逼られれと戦うち  
 照天が去向を失ひ尋んとする処に夜に寺に南阿上人あり過去半のゆを  
 示しこれ小栗村運の身とて経を悟十人の郎をばね三洲に去誠討し至を  
 行居る又照天姫の豫て百仕し王とて城とゆわを候て逃匿し王とて横山が  
 追まの乃小殺され城と二人六浦まで走り日暮るれば漁人の家へ宿を借る  
 こころ小みといふのの多し此小栗の名武の臣あるが主家亡びて后に忍びり  
 さて其妻の小栗が妻は浪も是も主家亡びて後万を代を連てさる娘せり  
 又城の浪が前夫と連をひし射生子し其夫死とて浪小栗がとて仕



その時娥を人として喜ぶ。喜同くそのけり。不意母子對面して喜ぶ。娥を  
 忠のりりのもて姫のふも母に頼む。藤浪悪を殺す。姫を殺す。隨身の  
 寶を奪んとす。夫を殺す。これを悔怒。姫を捉へ。松葉薫くやと。  
 責さるる。みよ。既殺す。けり。を。姫の。人。手。井。か。ね。を。恥。橋。より。川。を。  
 投す。不意。人。買。松の。裡。に。落。止。り。其。時。夫。少。少。此。橋。の。上。を。り。後。浪。大。  
 ぞ。人。縁。故。を。問。ふ。橋。より。為。し。も。照。天。と。ゆ。大。怒。り。後。浪。を。斬。り。て。  
 人。買。ぶ。の。殿。を。追。つ。走。行。と。云。ふ。と。六。巻。の。書。ま。じ。付。り。其。中。喜。怒。  
 愛。樂。の。こと。を。い。と。お。か。う。後。な。せ。の。懃。懃。の。意。自。ら。傳。り。と。云。ふ。求。得。て  
 読。ま。る。と。い。は。し。と。い。ふ。の。と。 采。花。山。人。巖。堂。謹。誌。 九

寒燈夜話 小栗外傳卷之七

東都 絳山戲編

忠臣先非を悔く自劔伏  
 貞婦艱苦と忍で能操と守

且説照天姫と瀬戸橋より身と投し既に入水と云ふり不圖も漕舟の  
 舟に小落止りしが忽ち心失て絶え入り。そも此舟は是國戸美登が乗  
 舟に甲夜に波浪と約するところにて目今漕舟あるがぞ有り。美登と  
 橋の上より一人の女性ののが舟に花落しおぼろけ立出くれば橋の上  
 中へ云罵る声はこゝろ何とも弁かなく或は内亦の潮よどいて  
 女も流去れば橋の上のみの知れどなりぬ。さておのが舟に落るは  
 女を熟くくららえん。年九むりのほむなりは。人。顔。貌。の。い。み。ど。く



めて中 災難なれば好衣を脱ぎて襦袢かぶるべしと申れど、さうり尋ねて我主の  
 姫君を申すは、はなとてと申すを合はし水を灌ぎ多く抱くるよ。一盞茶付  
 のりて人公比はき復古のりしうの美登云語を和め女性にいうなる人よ在て  
 何も色は合ふ及び、あ明白お語りのあり。は方の為悪くはらうとて  
 のまうじと信実おやえは、照天姫と前刺波浪は実事を明し、幸たぬ  
 又ははらうとなれば、いづく戀あるお今美登う先景をうらまふ年、あはよ  
 うれの五十あもるこねとえく脊をぬり、びまの小山のごとく、顔は鳥羽玉の  
 姿とつとて何さぬ曲者とつてなれば、又波浪のごとくなるべしと云ふ  
 念じ、つとて偽て云かう。は公女の娘、なれば月のうをはくまは、まは  
 はゆ、は奴家の常陸國の産み、名を小萩と申す、おとどけぬ去来  
 國戸の為、お引され、當國檉堂村と云所の横山といふ者の、おとど  
 家婢は、賣渡され、三年、お彼、おあめ、の夏、このみ、あて、易れ、日、な、れ、ら  
 いう、あ、も、て、脱、出、せ、や、と、之、と、其、間、を、お、せ、と、せ、ら、う、は、今、日、ま、き、際、を、お、て  
 我、お、始、め、た、女、の、ゆ、ひ、は、ら、う、と、これ、と、候、て、二人、お、は、じ、く、横、山、が、籠、を、志、の、び、出  
 る、お、申、す、の、り、て、走、り、し、お、不、知、案、内、道、を、ぬ、れ、は、此、地、方、は、吟、呻、ま、し、ら、う、お  
 日、を、と、や、暮、ぬ、行、先、も、定、う、ら、う、ね、ら、此、川、上、の、一、盞、お、一、夜、の、宿、を、求、め、て  
 少、く、お、易、め、お、主、の、女、お、鬼、に、く、奴、家、二人、を、切、害、し、夜、裳、を、剥、ん、と、  
 と、ら、き、ぬ、ら、う、ね、ら、お、木、陰、に、酒、漏、ち、り、ひ、二人、其、家、を、脱、出、し、お、忽、ち、主  
 小、追、逼、ら、れ、連、な、ら、女、を、と、や、已、に、殺、さ、れ、ぬ、と、て、も、脱、れ、ぬ、秋、を、お、れ、ぬ  
 人、を、お、か、と、取、え、ん、よ、の、潔、く、入、水、し、て、死、ん、ど、り、の、と、身、を、痛、く、し、搦、ら、う、り  
 飛、お、不、図、の、り、お、助、け、ら、れ、ぬ、お、ま、な、れ、る、の、身、お、幸、な、ら、う、し  
 と、て、の、悲、し、奴、家、を、此、所、より、脱、し、る、お、秘、と、し、信、半、を、お、り、



言を巧むかたは流るりおのが名を小萩といひら夫木集也。

秋のうねぬ花ふしの花やうめはし霜小枯るる萩の里

といふ常陸の名もあつひしうて云いおるべし矣登の熟くと打んま

居りしが誑てはあひしし女性の宜ふ心公を好む事事之ついで

我も常陸の生なれば彼國のことは社知のぬ然るは女性等の云ふ女

を陸人らぬ怒られぬ是二つあり又家婢となりて居ると宜くと容貌

の發み手足の清らうなるはわいいうでさる下賤業を志居る人なると

二つあり。又今宵宿うりある家主の女の波浪といひありのあてとどお

姐と等と我も愛人といひ強欲の人と彼なるそ女性等を殺して

送すは縁りのなうん是二つこみ此不審あり思ふも女性を武

馬光公の息女照天姫とてはまうまきとやりそれうらば我主なり。

我の名武累代の臣美登小郎為國之往昔主家盛んるに耐ふ

常陸もまよひて主君お代て國政を司り。邂逅湯倉小宅るるあれ

とも男子うねば外振もく大殿のええまのりの女奥方うねまのい

姫君はすのたの知れとええまのいしはともね。されば姫も某をえん知

るふしこはまじ然れども人の物語もて姫君の容貌もあして知りぬ。世も

似る人のありとええまのい女仕の影をせぬとも。大殿馬光公も似るま

中ふお同の某姫君の世去向を捜索するせん。斯むうり身と中

り。我忠志を憐れとてお同の實を明し終られと休むな。い

ゆれと照天姫へこれもまよひて仍練て我名を名告し。鎌倉お將て行く人

とて術ありとめと疑ふゆくまよひてはらみ。さる人さるも及ぶと

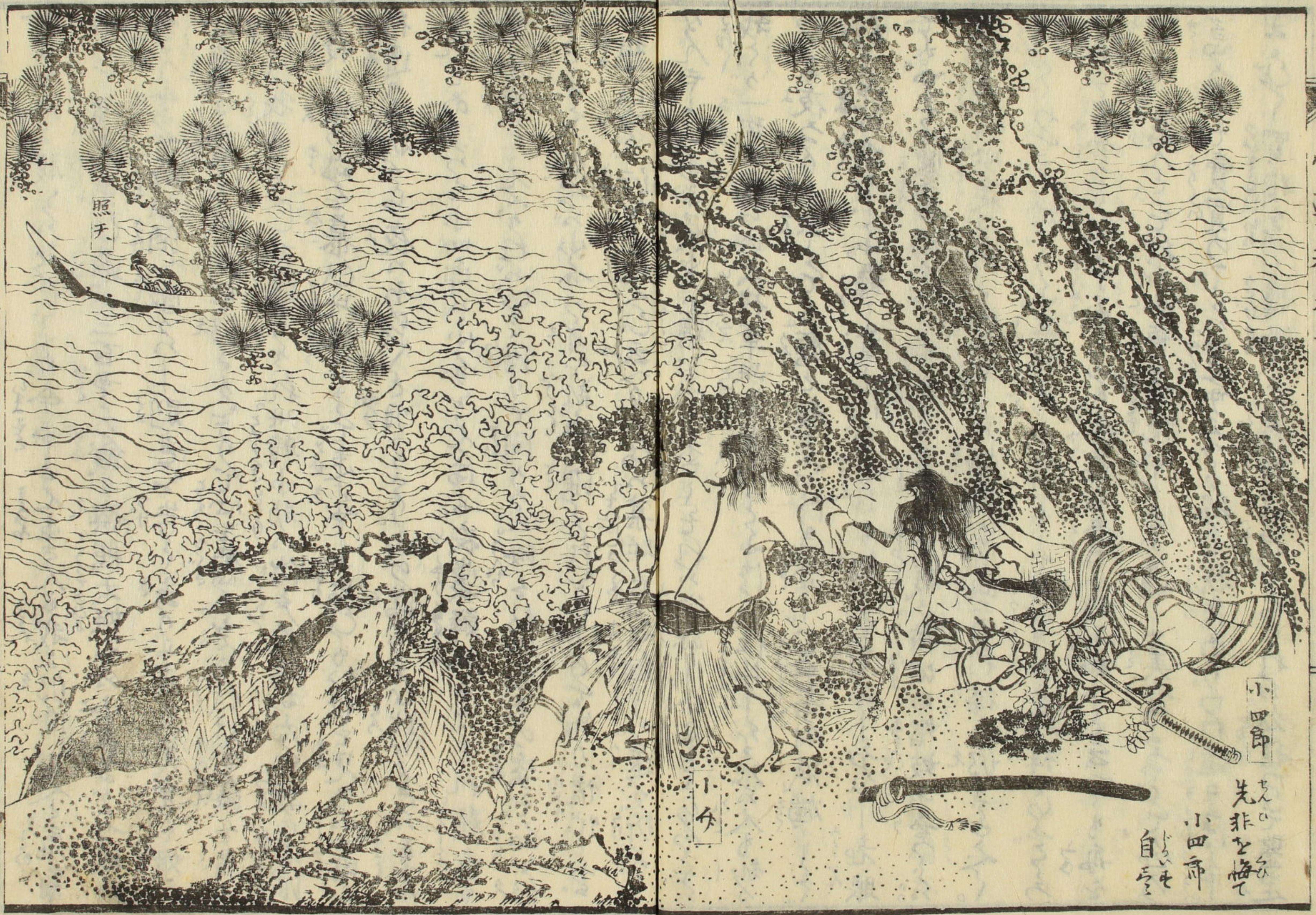
まげあつらふ。是れと尚まよひ同れと後の回意をせせと。ち伏



居々あて足登る赤心を傾けて説きこゆれと我こそは照天なりとて  
 名昔縁をさすより形きりのなりし小我実名を明せしと今又悔ふ  
 詮なれ移るからに此女奈何方への賣らんと往くをりて股愈入  
 とお小勉へ不意園戸仲間よ名をひくは三田の小登り一艘の舟は棹は  
 漕舟一うばの幸ひと呼とあ。よれ時うら小遭うらそ汝よんさるめめ  
 のはよ這方およよと叫かれ小登りの呼と回意して当少お母をさし  
 寄まらる美登の喜ひ嘆居る姫の手とりて舟梢に牽牛。紙燭は  
 顔ははしはけり。いふ小登り汝う此女けを買ひつや。宜万利あふ  
 とやと心と傍うお母こゆふ。小登りの姫が顔むせを。熟くとうち着は  
 近事着るお買物ながら。夜眼を目とらしとあり。鑿換まじきその  
 めめあふは汝の胸の算盤と此二の差とのらんぐれと。二百貫ゆく賣  
 ならんやといふお母は是の頼いふの否くそれ欲除し小登りといふ  
 我々が一斑のうちの大将軍此生業のことおはは仕換ふなら人も知る  
 いふお夜うると云とて。顔と顔とを合し。一盞茶付紙燭  
 顔の穴の明やふ。熟く着るわが盲目を知らずと先さしむひ。老眼  
 ても。おらる鑿換めらるまや。我まこあふ大磯う粧坂の娼妓お喜らる  
 五百貫の必定かれと汝の口は知識あり此の利徳をひきこく  
 時とわてえせうらふ。其好意をむけむと我買物お不祥といふ  
 さぬこそ易く。縁千重らるも無益の賣らぬお如くと云つても舟を  
 時と。まんとしてそれ小登り慌忙おらる。やよ美登よるごとく  
 当ふらるぞ賣買のころお母年うらる縁を換失あり。ワレ近日は甲  
 まじく買損まじく擔物して幾許の損をさるれば。お様つて鑿定

居々あて足登る赤心を傾けて説きこゆれと我こそは照天なりとて  
 名昔縁をさすより形きりのなりし小我実名を明せしと今又悔ふ  
 詮なれ移るからに此女奈何方への賣らんと往くをりて股愈入  
 とお小勉へ不意園戸仲間よ名をひくは三田の小登り一艘の舟は棹は  
 漕舟一うばの幸ひと呼とあ。よれ時うら小遭うらそ汝よんさるめめ  
 のはよ這方およよと叫かれ小登りの呼と回意して当少お母をさし  
 寄まらる美登の喜ひ嘆居る姫の手とりて舟梢に牽牛。紙燭は  
 顔ははしはけり。いふ小登り汝う此女けを買ひつや。宜万利あふ  
 とやと心と傍うお母こゆふ。小登りの姫が顔むせを。熟くとうち着は  
 近事着るお買物ながら。夜眼を目とらしとあり。鑿換まじきその  
 めめあふは汝の胸の算盤と此二の差とのらんぐれと。二百貫ゆく賣  
 ならんやといふお母は是の頼いふの否くそれ欲除し小登りといふ  
 我々が一斑のうちの大将軍此生業のことおはは仕換ふなら人も知る  
 いふお夜うると云とて。顔と顔とを合し。一盞茶付紙燭  
 顔の穴の明やふ。熟く着るわが盲目を知らずと先さしむひ。老眼  
 ても。おらる鑿換めらるまや。我まこあふ大磯う粧坂の娼妓お喜らる  
 五百貫の必定かれと汝の口は知識あり此の利徳をひきこく  
 時とわてえせうらふ。其好意をむけむと我買物お不祥といふ  
 さぬこそ易く。縁千重らるも無益の賣らぬお如くと云つても舟を  
 時と。まんとしてそれ小登り慌忙おらる。やよ美登よるごとく  
 当ふらるぞ賣買のころお母年うらる縁を換失あり。ワレ近日は甲  
 まじく買損まじく擔物して幾許の損をさるれば。お様つて鑿定





照天

小四郎

先非と悔て

小四郎

自と

小



かぐ。汝も腹をなじし。今少くも人並に我もほほしめんと。鹿角  
ついで。價を争ひ。遂に三百兩の錢は。換照天姫を。小鷹が。あつた。  
後。あせむ。酒を。酌ら。別を。告ぐ。去り。美登。姫を。  
小鷹。賣つ。利を。得。心。慰め。身。代。金。湊。肩。  
荷。我。を。還。り。此。時。小。助。の。瀬。戸。橋。お。わ。な。て。妻。の。波。浪。  
を。殺。姫。の。跡。を。慕。ひ。此。地。方。を。走。る。お。ひ。も。か。け。を。見。の。小。四。郎。  
行。遭。り。折。ら。夜。の。め。ぐ。と。明。り。山。の。端。を。む。比。な。ま。ら。互。  
それ。と。あ。ら。小。四。郎。小。介。と。は。女。衣。裳。鮮。血。ま。ま。れ。顔。色。も。  
常。に。變。て。く。れ。が。い。と。行。り。て。同。く。ら。汝。と。い。え。その。姿。を。公。に。  
か。め。り。小。介。の。身。を。鮮。血。は。流。れ。を。と。り。て。知。り。慌。忙。お。  
を。相。ひ。ず。り。行。き。ぬ。い。云。へ。は。某。昨。夜。お。細。より。還。り。折。ら。り。  
門。辺。お。わ。な。て。不。意。妻。波。浪。が。し。り。と。出。行。ふ。り。遭。り。其。ま。ぬ。い。  
噂。を。わ。れ。内。方。行。き。と。同。い。お。回。意。の。せ。に。走。去。れ。が。涙。一。筋。  
家。裡。は。う。り。不。審。も。妻。の。連。子。の。死。と。い。ふ。こ。ろ。も。い。う。お。  
縁。故。を。妻。も。知。れ。め。と。跡。を。襲。り。よ。は。這。所。よ。と。尋。り。お。瀬。戸。橋。  
ま。ま。と。し。お。一。人。の。女。性。責。さ。ら。み。殺。さ。ん。と。い。ふ。刀。の。下。女。性。  
を。舟。を。踊。ら。し。揚。り。川。へ。飛。り。お。不。料。舟。の。漕。ぎ。お。援。ら。し。  
と。い。う。舟。と。潮。は。流。さ。れ。て。沖。の。方。に。去。り。其。耐。を。お。波。浪。は。追。  
近。は。い。を。投。り。女。の。身。を。人。と。同。に。至。慈。傷。ま。も。松。の。下。  
女性。を。照。天。姫。と。い。ふ。一。つ。の。愕。然。と。是。の。ま。り。善。悪。の。心。を。  
弁。せ。し。主。小。介。を。腹。に。け。り。縁。故。を。同。乳。め。を。唯。一。刀。は。波。浪。を。  
切。殺。し。つ。姫。君。の。跡。を。慕。ひ。尋。り。お。前。に。我。着。り。お。舟。の。内。方。お。



めりともあつて彼の烟ふまきざれんさざれんゆとせんきなくも此所まで  
まきまき見人遭く力おぼろしき今より同胞力を合し尋ねて此  
羊心を砕く孤忠を遂入り。這取の台船をえりての付くぞ  
やと舟の揺れを復話ぐ小四郎これを安よる我身よ安んぬれが  
おのれが罪を悔し怨と慙愧の涙さくみみて頭を低く回意は小助  
と不審さよよてまきまき事とせざるはく胸ぬぐり俄小積  
の奔り。岨くあつて見人といふとまきまきまきの鼻うちうひの対は  
舟の頻おせりてと見強がとさなまの用ひの疑がく小介と  
膝をとりはしてよめやと想へど安んぬる心をそくさくお同と答ひ  
責めとさうらうらて居る我邦の知れぬも姫を助し其舟の則  
おんこの舟おきて生業がれが姫君をたす尋常の女性とまひめやまの  
何とく。賣渡るる志あらざや。それの多くの錢金を持ちあつて  
沼といられてまきまき小四郎が舟の多踏のまがく刀をぬくとえり  
志の腹まきまきと突さてうり。小介の慌忙をまきまきと狂言じまきまき  
何寺の故れ生害と縁故を生けもせと我は嘆きをえせまき。嗚呼あつた  
かた心やと涙まきまきとあつた。小四郎苦しい自分を衝ゆめく狂氣世  
あつた。これら深き子細あり。心を静めやあつた。後の多踏お  
けし。その縁故といふ。汝が妻なり。後浪が甲夜よまきまきといひつる  
今夜不図まきまき女は二人をけりてやと買んと想ふ心あつた。まきまき  
まきまきと慌忙く。云はし行を生業のことゆめつた。あつた。其跡は陰謀  
ゆめ折悪くは瀬戸橋おきて結とあつた。まきまき。彼下ゆ生余んと物  
をわけて家子還り。舟より瀬戸橋へ漕行とまきまき。不意橋の上



よりのやうな一人の女性の飛着てそのまゝそまゝ終入を助け起して  
 介抱し熟く入るふゆとなぐ。故殿の面はあつてり。姫君よあはれ  
 やと赤心をうちつけて。姫君さうやと同一うと。我容貌は緋りや  
 宜しきを明しあつて。嘘言をのこ宣ふ。さうして姫君あつてりし  
 と思ふ公のほろろ折る。三田の小夜姫と一目みるよりも頻  
 らうて價よく買んとあつて。欲心の登りこそ我不運り。このねくも  
 主人を賣公を樂しくする道まで。汝は遭く姫君と。とどめて知る  
 不忠の科。今世莫泉の地主。罪を贖ふ。自害ぞや。汝らの後姫君を  
 尋出し。此金りて授ひまわらせ。我科を。宥めてほき。後我身  
 の藤忽を悔。泣涙血。色。小介ハ兄が心根を。念  
 あつてめと。あふふはけて云。我言語。悔は。涙を。

云りの。それと。知る。縁が。賣。して。其。身。の。替。り。ん。過。り。て。改。し。お  
 憚ら。と。聖。人。の。教。も。り。今。姫。君。と。知。り。と。買。は。人。を。尋。ひ。て。姫。を  
 賤。ひ。ま。わ。せ。ら。不。知。の。罪。の。負。ひ。か。わ。ら。ぬ。の。事。知。り。ん。も。ま。ま  
 ま。あ。ん。を。好。縁。ま。ま。其。に。悪。く。云。は。ら。ん。と。恨。み。の。前。後。を。并。で。め。こ。し  
 たりや。さうと。わ。ら。ぬ。が。誤。り。の。兄。身。替。り。ん。外。其。悔。を。御。ら。持。り。も  
 中。て。わ。ら。ぬ。や。必。竟。人。の。心。を。励。し。不。忠。と。さ。ま。は。し。赤。心。と。し。げ。り。も  
 詮。な。ら。ぬ。と。か。れ。は。流。し。嘆。き。た。れ。小。四。郎。首。と。左。右。は。打。振。爾。の。事。を  
 我。此。侍。よ。及。が。と。月。の。甲。斐。な。れ。を。恥。て。なり。名。武。累。世。の。先。臣。が。零。落。る  
 云。な。ら。ぬ。世。の。生。産。も。多。う。り。人。の。恐。ろ。國。戸。と。なり。は。体。こ。し。乃  
 浅。後。や。雨。の。僻。り。を。做。し。あ。り。天。罪。忽。ち。報。ひ。す。て。主。君。と。知。り。事。成。し。



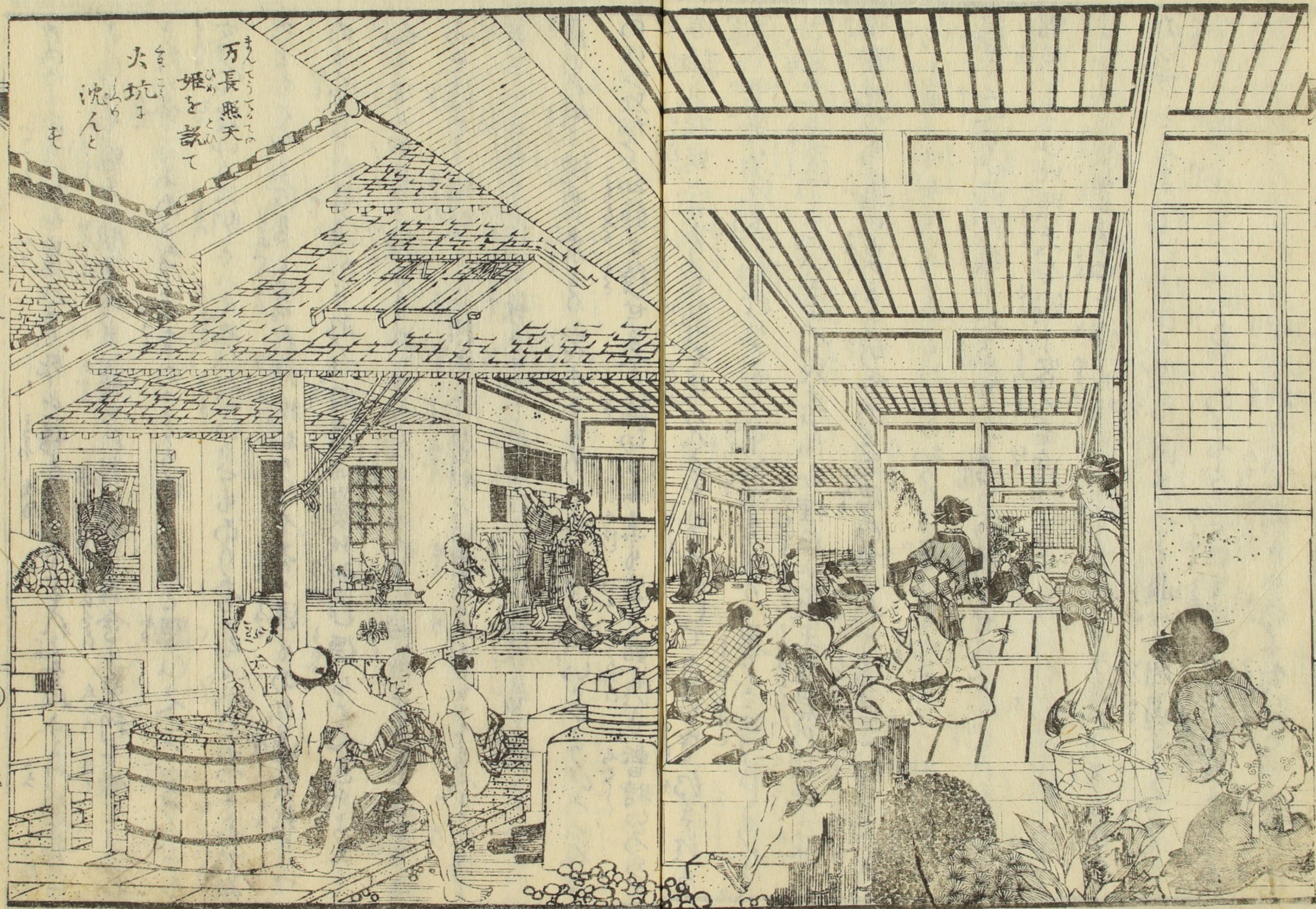
あぐ不忠の名を肩て。すむせむ瀬のうづらに。かほ拙れ我まねの碑云  
存命居るとも。いづて主君を復古せん。汝の二の忠臣なり。又方ぞん  
あつれか力成はくし。姫君を尋索して。給てより。許家め。小栗とのこ  
誓姻な。はしまぬ。して名武の家を再直。し。その序もあつらふ。我身  
の咎も償て。入。ま。う。ま。う。こ。汝やま。あ。か。子。どもに。遭。は。今日。の。み。語。け。り。と  
る。れ。ぐ。も。此。二。か。り。と。て。悪。る。ゆ。ゑ。な。う。ま。う。忠。義。を。切。り。下。此。子。忘。れ。が。我  
ご。と。く。永。く。朽。名。を。達。ま。ん。と。能。も。傳。へ。く。も。ひ。ゆ。と。云。は。く。左。小。突。ま。し  
刀。を。右。手。に。ま。し。じ。か。ん。と。刀。を。と。り。ま。し。喉。の。吭。を。か。た。給。て。俯。伏。し。な。り。て  
失。ふ。多。り。小。介。か。今。ま。う。同。胞。は。別。の。涙。せ。ま。い。へ。く。と。屍。ま。と。が。り。泣。居。る。斯。く  
果。ぬ。こ。と。な。れ。ば。兄。小。四。郎。の。屍。が。近。近。ま。寺。院。に。送。り。古。墳。一。基。の。土。と  
なり。その身とそれより。姫君の行。忠。成。搜。索。人。と。六。浦。の。里。を。ま。出。さ。り。  
不在詰下。再説。照。天。姫。と。三。田。小。倉。小。買。ら。れ。い。う。か。なり。ゆ。く。と。ぬ。と  
易。死。心。も。せ。ま。り。け。り。小。鷹。の。姫。の。容。貌。を。ん。ん。小。桃。李。却。り。姫。と。芙蓉。恥  
を。含。の。敷。色。な。れ。ば。心。裡。か。ま。り。か。く。喜。び。これ。下。和。の。壁。な。り。縁。と。十五  
城。ゆ。り。換。え。た。美。人。なり。我。近。年。不。利。ゆ。て。六。指。較。肌。か。ん。の。買。換。物  
の。こ。ま。く。美。酒。を。飲。め。も。其。ま。は。枕。は。け。ど。易。く。睡。ら。ま。り。し。ふ。今日。ら  
女性。を。召。す。此。ほ。の。鬱。情。忽。ち。お。散。れ。存。食。を。下。めて。易。く。り。る。入。常。を  
ふ。寸。善。苦。尺。魔。と。い。ふ。と。の。り。斯。る。室。を。召。て。久。く。貯。め。た。ふ。の。ふ。と。と。お  
船。船。京。師。の。方。へ。赴。き。し。折。席。風。の。便。悪。く。皆。時。遠。州。相。良。は。泊。繋。して  
居。る。り。な。れ。こ。濃。洲。青。墓。と。い。ふ。所。に。長。と。之。の。の。り。たり。其。家。代。り  
旅。店。を。し。て。家。富。栄。へ。は。此。頃。こ。の。青。墓。の。山。陰。道。の。驛。路。ふ。て。い。れ  
振。へ。る。地。方。なり。万。長。か。家。あ。の。ま。く。の。娼。妓。を。貯。る。旅。人。の。足。を。止。め



たり。さればそれがなうなり。京鎌倉ももたらまざる美人もあはれ上下  
 どの大名をとりめ下賤のりすても此譯路は宿りさるりのへまなく  
 万長は許は旅宿は娼妓を揚て舞唄は旅情の鬱を慰めり。さし  
 主万長も眉貌の勝れ。舞舞舞の道は社の女子さ其品より。  
 幾許の金銀をとりて賤ひたれ。さう万長不用のりて遠州相良  
 事りし。園戸小齋といふりの小萩といふは。女性を俱して是と考へ  
 今此両舟に取撃せり。と里人の口唄を中を付く。舞舞舞の行く。さし  
 小世は比なれ。女なら。三百金。賤ひく。青墓の里。小連。帰。娼妓。小  
 せん。とやへへ。お照天。姫。の。嘆。き。悲。し。これ。を。辞。ま。至。夜。行。路。り。わ。て。  
 恥の守本尊に祈。お祈。さ。る。は。奴。家。不。幸。や。と。多。くの。艱。苦。を。遭。我。回。  
 危。あ。り。し。と。佛。の。履。庇。ま。よ。り。免。る。こ。と。を。祈。り。今。ま。こ。此。地。方。

漂泊は娼妓とかりて節を失ふんと。女子として貞を守りて。生  
 生く甲斐なれ。事なれ。命を縮ま。多し操を全うし。めんと。  
 心は命。嘆泣し。こひきう。居。は。公。理。正。は。足。王。照。君。の。胡。地。は。娘。  
 揚貴妃の馬。鬼の哀。も。お。や。あ。る。と。思。ひ。や。う。れ。て。表。ま。さ。万。長。を。價。  
 高く買。は。女。を。つ。つ。も。た。か。お。う。ん。と。さ。さ。か。心。の。糸。も。強。て。  
 客を遠。させ。は。猿。に。た。り。て。多。くの。後。を。せん。と。を。悲。れ。公。利。の。る。  
 娼妓を。ま。り。た。照。天。を。偷。客。人。を。迎。ゆる。や。斗。ら。ひ。ほ。ま。さ。と。報。を。  
 せ。へ。る。お。彼。女。の。心。を。保。一。日。照。天。を。慰。め。て。云。へ。り。は。は。心。身。も。由。緒。  
 の。方。と。見。す。お。い。は。か。斯。々。落。ま。あ。て。過。世。の。因。過。も。な。く。使。し。  
 今。さ。う。悔。て。詮。さ。さ。は。此。家。お。め。る。あ。い。の。女。性。せ。れ。ね。が。の。娼。妓。は。あ。い。を。  
 或は親夫の。あ。め。の。あ。い。中。を。別。れ。或は園戸の。あ。い。の。あ。い。引。と。の。川。舟。を。沈。





万長照天  
堀を築て  
火坑子  
沈んと  
毛

小泉卷之廿

東巻之廿

七



のうらぶ生て恥を真んより。死と操をさへんとされど。それぞよ叶はせぬ  
 よふらふも福あつ朋輩の身を賤られ親同胞も再會し榮利を傲をすられ  
 とけい命がふあふあふ幸のふもあつめと想ひ入て心づかぬも  
 客を逢ゆるに馴るハ又思ひ慰むるもあり。奇ある人のふらふ木竹旅  
 のこもえくは多と変れ波枕ありひをさる凄もあり。遂に頼りけ  
 める人ふなれ多味かき好は睦言も憂以慰む便もさへ入るよよく  
 ぬを決め奴家う練ますしめ人とやえられども回意さあせき泣は体  
 あそ諱め一娼妓も言は語そ今替付この里の久々香をさへ入ると云は  
 其亦をさおと主の万長云々。彼女性の心は容易に動かし  
 雨のれ財練ぬ素より岩木あもあぬ人なればいさくうひらぬ  
 のゆれたく公静は待せま人と誹むるも主も実と點路と暫時うらむ

過されと照天の公露もともうらあるくもえくはよ前の娼妓の言を  
 入て其の置あつ妖悪と蜜に主と高議し人なれ又照天を招き一樹の陰  
 一河の流を汲さ入るる定化生の縁とらりり。あんな此所わつたせまひ  
 既一幾月をう経まへ其交はさふあつて教まわつてことあり。  
 今日までも志守と改と操を守らんとあまふそのいよととと再われ  
 斯く居あつて主の怒れあひ奈何なは方へう賣渡され幸れ憂月が  
 えまのんけ耐今日のてん思ひまやとも及べし主の心強らえんを  
 娼妓とせんともあもあつて角角小換をさせねば腹悪うもおひひ  
 やうあつ其心を推し入る足おんをいよととと想ひ斯と告まわつた  
 なること信をちてるけしうの照天とこれを信とあひ娼妓あつたうと  
 いまうん辛苦の業も露をさるも厭ひはくもあつた情は傲をさき



業を教てとありけり。彼女をよほしぬと云ひ。此家よ三人の豊婢  
 のり各一ツ死の業あり。そのうち一人を奴家が如き。りの三十人  
 は浴を湯を沸せり。それを用ゆる水。此より十八町彼所。しよれ  
 法あり。この水人の肌を以て白玉の如く。かきし。しよれ。志を用ひ。傳  
 なり。その日毎七荷汲。又一人を畜馬十疋。秣を蒔く。食し。しよれ。  
 又一人を日く。七桶の芋。積り。此三人が。做業を一人して。せ。娼妓と。ぬ。  
 と。主は。損を。かけ。喜んで。其を。是。容易こと。お  
 め。尋常の人。做。此。事。を。做。久。や。否  
 照天。これを。及。及。及。は。業。が。難。と。お。入。と。も。も。と。入  
 其。の。に。堪。え。て。死。と。は。い。う。く。と。心。を。定。め。て。う。ら。ま。て。是  
 何の難き。の。の。日。より。豊。婢。と。い。う。今。宜。し。三。の。業。を。調。り。

中とて。此。の。主。お。え。の。げ。で。め。れ。と。い。と。易。ら。う。み。え。り。た。れ。た。  
 彼女。と。後。工。の。相。違。て。免。角。お。入。と。詮。と。な。く。主。万。長。子。と。告。げ。た。  
 主。も。案。子。差。し。と。な。れ。と。既。云。知。を。流。し。う。人。と。又。外。母。と。さ。き。や。う。お。  
 常。言。の。と。百。貫。の。質。か。立。一。疋。の。お。ち。して。其。翌。日。より。照。天。と。豊。婢  
 お。ひ。下。し。い。と。荒。け。な。く。後。は。り。あ。れ。る。其。做。入。や。と。て。少。あ。て。も  
 懈。怠。な。が。ま。を。罪。に。娼。妓。せ。ん。縛。さ。り。痛。き。う。照。天。姫。翠。帳。紅。圍。の  
 成人。侍。女。よ。乳。人。と。傳。う。れ。身。の。浅。様。の。賤。女。と。は。方。見。さ。る。え。も。  
 笑。も。及。び。ず。水。汲。桶。と。あ。ら。う。か。れ。荷。ひ。は。拾。八。町。彼。所。の。野。邊。乃  
 池。水。を。汲。入。と。て。お。し。ら。は。り。の。錦。を。き。く。と。身。も。あ。ら。う。は。狭。衣。の  
 羅。袴。お。も。堪。へ。ぬ。王。の。肌。昔。の。錦。を。き。く。と。身。も。あ。ら。う。は。狭。衣。の  
 裾。の。う。ら。め。異。な。く。足。に。ま。う。ら。は。懶。さ。高。く。掲。げ。歩。む。折。し。も



冬の風寒み。まゝ入足。凍ゆれ。行惱まは。まゝ。たぐ桶の  
 肩。ゆへ。と。彼。あ。あ。う。と。息。を。衝。世。あ。体。を。肩。と。按。身。を。苦。し。と。  
 道理。之。斯。く。一。日。こ。る。と。一。荷。の。あ。も。汲。は。は。再。は。耐。ま。万。長。の  
 怒。と。觸。と。く。幸。何。あ。ん。憂。を。入。る。悲。や。と。幸。な。死。あ。ど。成。か。き  
 口。は。暫。耐。涙。ま。れ。る。が。自。ら。心。を。勵。し。我。く。望。む。業。な。れ。が。身。を  
 肉。醬。ま。た。は。と。て。も。な。ご。厭。ひ。ま。き。り。う。と。辛。し。て。池。の。池。お。至。り。  
 其。の。光。景。を。こ。る。ま。度。中。う。は。郊。中。よ。方。十。四。五。間。ぐ。り。も。ま。る。  
 圓。池。の。傍。一。樹。の。松。の。り。こ。ゆ。あ。わ。て。熟。く。思。ひ。む。十。八。町。が。や。と。水  
 か。た。桶。と。あ。ひ。あ。う。ご。お。幾。許。の。幸。苦。を。な。せ。り。さ。あ。を。此。桶。ま。た。汲。が  
 一。歩。も。行。と。耐。あ。は。し。ま。し。く。七。荷。と。い。あ。を。や。い。う。て。耐。堪。え。ま。き。生。存。令。て  
 恥。え。ん。よ。う。死。と。ま。ま。と。ま。う。く。増。さ。ふ。め。し。が。や。此。池。よ。身。を。沈。ん。と。ま。ん。思。は。

極。め。年。頃。れ。ま。あ。せ。う。赤。肌。の。守。れ。祝。音。お。祈。誓。と。う。と。ま。ま。ま。う。り  
 奴。家。い。う。は。因。過。や。父。母。あ。死。別。と。夫。の。生。別。と。馬。る。か。と。も。か。た。憂  
 身。に。く。こ。く。は。も。死。を。ぐ。り。ほ。れ。と。再。び。夫。は。還。命。父。の。執。を。報。り。め。と。  
 け。れ。る。命。を。今。日。ま。で。存。生。と。ま。ま。と。万。長。が。使。え。れ。り。と。の  
 たり。ゆ。ね。と。ら。り。川。行。の。う。れ。死。ん。悲。し。さ。か。今。此。池。よ。身。を。投。ぐ。命。が  
 縮。め。く。ぶ。あ。ん。今。世。う。い。て。あ。と。流。し。ま。呵。責。を。受。え。は。り。の。う。う。れ。未。見。ら。さ  
 こ。こ。と。量。ら。れ。て。い。と。浅。狭。く。悲。し。ま。れ。南。を。や。大。悲。の。心。折。ま。ひ。空。一。う。う。の。る  
 極。限。に。達。ま。さ。し。て。父。母。は。遭。と。ま。ま。と。念。し。け。死。ぬ。る。是。悟。を。極。め。て。も。  
 妹。背。の。釋。ま。ひ。う。ま。れ。て。我。夫。今。の。う。あ。て。は。ゆ。ま。ま。と。中。ん。執。り。や。今。世。の  
 別。よ。今。一。回。青。墓。の。里。れ。鳥。さ。入。哀。れ。を。添。る。声。も。か。か。い。と。め。め。夫。鳥。の  
 別。よ。て。啼。や。嬌。る。憂。を。辛。なる。照。り。ぬ。り。う。と。斯。く。居。る。と。れ。と。く。

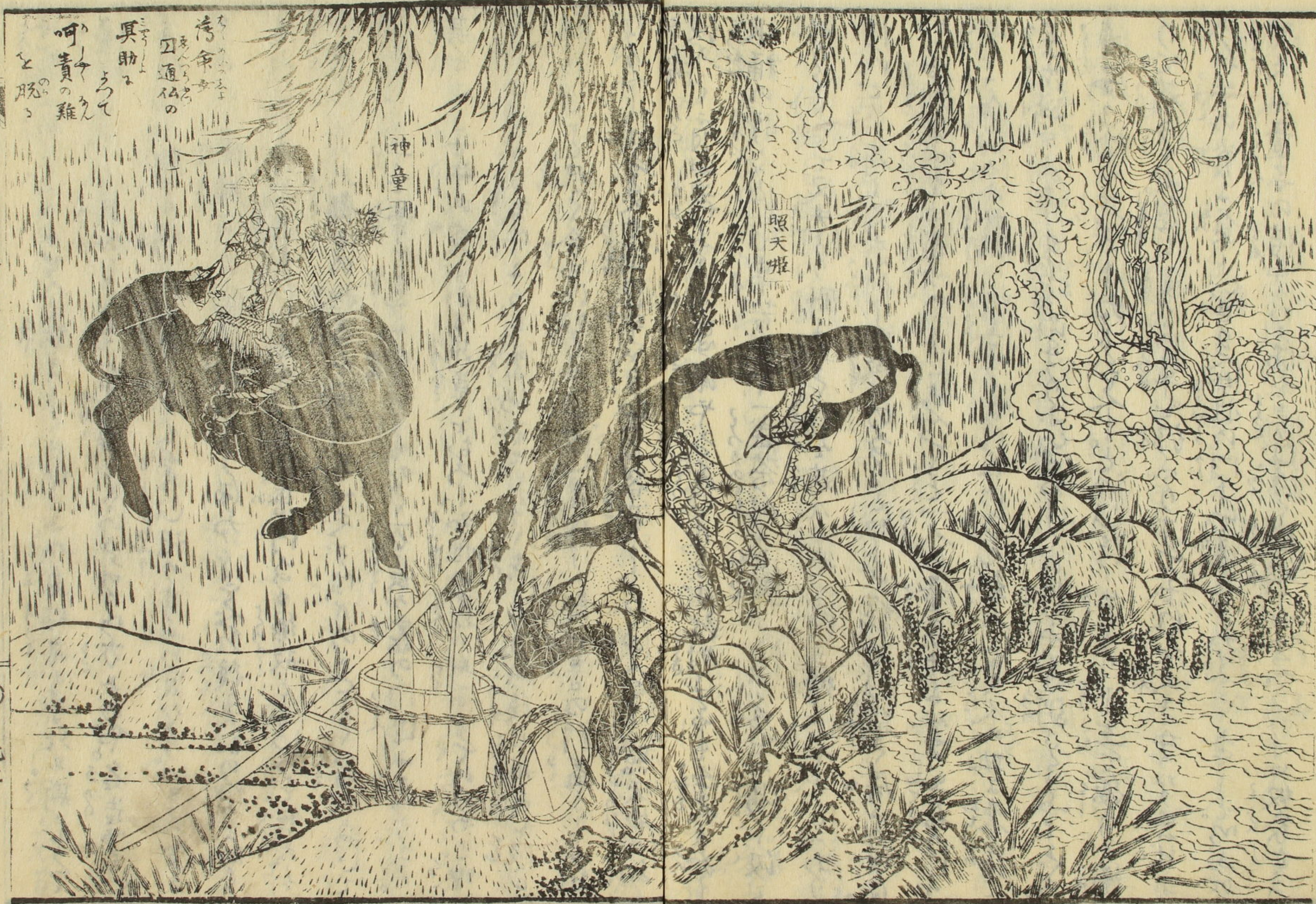


死へとあつりたれ時よ不思議や観世音の如く池中のあまらりひり  
 拜されぬひりれがこら怪しと移りひり。より仰ぎらり。観音と云えり。と  
 さす。此世の底に大悲の待せり。あふこそ。と又身を投入と云は折ら  
 遥の松れ梢より。光明赫として。観世音出現す。いと微妙のは聲  
 あら。衆生被困厄無量苦遍身。觀音妙智力能救世間苦心と云ら  
 せ。じて時を待ら。自ら困運の耐あふ人と宣ふと云。お忽然として。形  
 失せ。松吹風の御音の。且よ。入へ。く。新も。は。照天を。奇異の。お。り。ひ。は。  
 め。さ。ら。り。と。あ。ま。有。が。や。罪障。消。き。此。身。を。も。大。意。の。救。ひ。あ。ら。と。松。の  
 梢。を。伏。拜。と。感激。の。涙。せ。れ。あ。へ。と。双。の。袂。を。湿。ら。り。潮。あ。つ。て。照。天。姫  
 斯。秋。と。な。ほ。ほ。告。と。い。く。空。く。做。こ。ら。り。人。の。一。回。ま。な。を。業。を。我。を  
 十。回。ま。な。を。ね。が。な。ら。や。あ。ま。で。あ。え。き。と。男。總。出。し。け。桶。ふ。あ。ら  
 汲。入。く。肩。お。荷。あ。ま。不。思。議。や。あ。ま。を。り。ら。ざ。れ。付。ご。あ。も。字。命。り。放。り  
 水。桶。の。持。く。と。して。辛。苦。な。く。一。盞。茶。付。よ。七。荷。と。い。ふ。あ。ま。易。く。汲。こ  
 ぞ。り。と。さ。て。又。夫。より。野。よ。出。く。秣。を。荷。ん。と。あ。り。り。繪。よ。ん。と。あ。り  
 ほ。れ。と。草。薊。と。い。ふ。奈。何。と。做。り。の。ま。り。と。知。ま。ね。れ。お。ひ。ほ。く。居。り。け。は。  
 か。る。処。へ。忽。然。と。笛。吹。つ。ら。し。あ。ぐ。く。と。一。人。の。童。子。牛。も。あ。り。出。ま。り。し。が  
 姫。を。つ。ん。と。い。う。お。女。性。の。此。里。よ。え。ま。ね。れ。ぬ。方。と。あ。ら。貴。人。の。世。よ。零。落。て  
 草。薊。女。と。な。り。ま。あ。ら。あ。ま。り。ふ。ら。ら。く。は。ね。お。ま。訓。と。ま。あ。ら。と。い。ふ。  
 童。子。が。草。薊。女。と。な。り。ま。あ。ら。と。い。ひ。ほ。く。牛。より。下。ま。て。毎。ら。ら。瀧  
 り。て。薊。々。ら。ふ。忽。ち。琴。の。草。を。ほ。く。り。さ。て。を。れ。を。大。き。中。ら。な。は。お。お  
 入。れ。牛。の。脊。に。負。し。ま。り。ま。り。女。性。の。門。ま。て。送。り。ま。わ。ら。ま。ら。と。い。ふ。あ。ら  
 照。天。と。童。子。の。信。中。ら。な。は。を。喜。ひ。ゆ。く。感。謝。と。云。え。り。け。ら。奴。家。ま。ら。

果巻之七

七





照天燈

神童

高命  
四通仙の

冥助

呵責の難  
と脱











女性と奈何苦しむの侍や教之のいと慥はく入ては語りあり  
 做べんやうもゆめと有々は照天をひよも同せまりのうねもより  
 爾くのいことまへまふらるが奴家せんぞを知らぬらうせむと心  
 慥しく公羽を年も長めかかたことともあく弁入まめめあを直  
 慈悲の面をりて教へてんやと嘆きまねを公羽を傾けまじ  
 考へて居らういづ噴嚏はく云出まぬその容易かなるうらうらた  
 なる頼まふを余ふも難直なれは善悪のとうれはどかも做  
 ろり整いことともゆらんよく愚かきまへまふ山小往一錢をりて  
 童子を雇ひおんがと二人て小松と女某とを穿身入然り財の知財お  
 きて多くの小松と女某とにばく。さてそれをを用ひてばど残しを解わ  
 を市よりておれ昆布海老干鰯とふ交易とて又それをも用のほど

して解まらるをりて再び山小往香橙持は家あてかへ必まらん  
 換ふとまへはあそ照天公ゆく感激し我高買の道と知ふと  
 しくも斯做んま十倍の利をばくお知まらるは此公羽陶朱術お  
 堪能せりと馬く感謝して別まらばあまりの天のまま公羽らるを  
 後日運を用く財のうか今日の恩を報らむと心念しあう還り  
 うらめ何方へ行らん公羽が次女とていふらうらりの不思議さ  
 四五歩もまふりて捜索する。新うおんをさては是も祝する大菩薩乃  
 権小公羽と現トのひ妙智力の方便を授けまらむし我難を援け  
 のあういとまると有かき去跡を伏拜を感さの涙は因ひまらり  
 さて公羽の教はゆせ山小入く童子を雇ひ女某と小松をばくは財の  
 間ふまき採りぬは是を負て市へ行行くの品を交易とてはあ







